

本邦の道路に就て

京大名譽教授
工學博士 田邊朔郎

今回の萬國工業會議で來朝した人から、日本の道路はなぜこんなに悪いのかと聞かれて返答に困却した人もあつたが、歐米先進國の道路だつて、見事に行届いて來たのは近年のことである。やはり年月を経て完成するより外はないものであらう。

大正二年(西暦一九一三年)にロンドンで萬國道路會議が開催されたとき、附屬エキスカーションがあつて、其時分から盛んに使用されて來た鋪裝用のターマック材料を作る會社のある、アッブルビーと云ふところへいつた事があつた。用意された十餘臺の自動車へ視察員が乗り込んだら、發車前に眼鏡と少し計りの脱脂綿を渡された、何んの爲めかと思つたら、鼻の穴や耳へつめるのであつた。自動車が走り出すと土煙はモーザーと起つて暫くすると誰れの外套の色も同一に見へる様になつて仕舞つた。今では道路鋪装が津々浦々まで行届いて居る。

私が初めて道路法案に接したのは明治二十八年の三月内務省に於ける土木會の諮詢案で、當時調査員の一人となつたのは三十五年も前の事で、其後急には實施の運に至らなかつたものであるが、今

日では道路法施行後十週年にもなる、月日はたつて見れば早いものである。

本邦の道路上に車輌の利用された事は昔時は少なかつた。有名な廣重の東海道五十三次の繪を見ても、江戸の荷車と大津の牛車とを除いては其他には全然車の隻影もない。當時の交通状態は是でよくわかる。

明治になつてからは人力車、輕運車、馬車の發達のため明治十五六年頃迄には東海道と東山道とで東京に達する車道が出來た。當時は道路を作ることが國策の大なるものゝ一であつて、道路縣令と云はれた三島通庸氏の努力は見遁すべからざることであるが、夫が爲めに騒動を起した事もあつた。明治二十年前後は、人力車旅行の全盛時代であつて、一日の行程三四十里で一新誠心の兩講があつて全國旅行者の便宜を計つて居つたが、其の後各地に鐵道が延長されて來て、幹線道路の交通は輕視さるゝことゝなつたが、自動車の發達のために、近來重大視されて來た。

自動車は鐵道敷設に不便なところの交通の役に立ち、鐵道の營養ともなるが、門戸口より門口を聯絡するがために、五十糠未満の近距離の輸送に於いては、鐵道を凌駕して益々盛んになると共に、かかる自動車の通行する道路の鋪裝は益々完全を要することゝなつて來た。

道路鋪裝の施行に要する機械と、之に要する材料の製作と其の運搬方法が、近頃進歩して來て、道路改良に著しき貢献を爲すことは悦ぶべき次第である。

(昭和四年十二月)